

井戸 56 号 遺物出土状況 南から



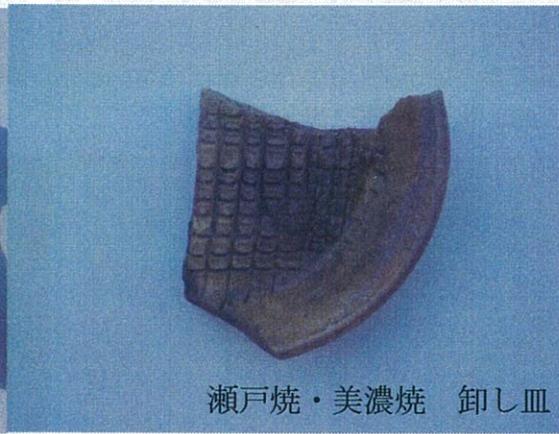
竪穴状遺構 01 号 完掘 南から

### 3 遺構

集落内には西端で掘立柱建物 8 号・302 号の 2 棟を検出したことから居住域と考えています。掘立柱建物の東側には自然流路 301 号を検出しました。浅い溝地状になっているのを生かし、北側の一部を水田に改変したようです。中央部は多数の溝と小穴・井戸・土坑を検出しました。井戸は直径 1m 前後の小さなものが多く、深さは 0.7~1.7m 前後で素掘りです。土坑の一部には渡来銭が 6 枚入った土坑 307 号、珠洲焼の壺の一部を打ち欠いて入れた土坑 317 号、渡来銭 1 枚と礫 3 個を入れた土坑 15 号があります。これらは、骨などは見つかっていませんが墓の可能性が高いと考えています。また、柱穴 370 号から出土した渡来銭 71 枚は、縫になっていたように纖維の痕跡がわずかに残っていました。竪穴状遺構 01 号（長軸 9 m × 短軸 7 m）・竪穴状遺構 11 号（長軸 8.2m × 短軸 7.1m）は 10 cm 程度の浅い落ち込みを検出しました。これまでの調査例と比較して規模が大きいことから、水田ではないかとする意見もあり、覆土の科学分析などを行って遺構の性格を明らかにしたいと考えています。



珠洲焼 すり鉢 15 世紀



青磁碗 13 世紀前半・15 世紀



唐津焼 17 世紀前半



### 4 遺物

陶磁器類は、平安時代の土師器・須恵器と中世の青磁・土師質土器・珠洲焼・瀬戸焼・美濃焼、近世前期の肥前系陶磁器・越中瀬戸・越前焼が出土しています。大半は能登半島で大量に生産され、日本海東北沿岸から北海道、太平洋側は奥州平泉まで流通した珠洲焼（壺・壺・すり鉢）と土師質土器です。近世前期の天目碗の出土は、喫茶をたしなむ有力者の存在を窺わせます。石製品では砥石、金属製品では銭貨・鉄滓があります。木製品では漆器碗・柄杓が出土しています。

### 5 まとめ

清水田遺跡は室町時代の 15 世紀を中心とする集落と生産遺跡（水田）です。掘立柱建物や多数の井戸を検出した南西側が居住域で、集落の中心と考えています。遺構の分布状況から、遺跡は調査区外の南側にも広がっているようです。調査区の北へ北東へ東で検出した中世の水田畦畔は、近世以降の水田耕作で壊されたのか、わずかな高まりしか検出できませんでした。

現在の鶴町の集落は自然堤防の微高地上に南北に二分しています。慶長 2 (1597) 年作成の「越後国頸城郡絵図」ではすでに二分して描かれています。今回の発掘調査で検出した室町時代の集落は、現在地へ移転する前の集落だった可能性もあります。集落が移転した跡地を水田に改変したと考えられます。



作業風景